

# V あきる野市の動物

## 1 調査方法

調査の内容・方法と対象は、次のとおりである。

### (1) ウォンテッド調査 (対象：哺乳類、爬虫類 (ヘビ類)、両生類、鳥類、昆虫類)

市内全戸を対象に 5 種類の目撃情報募集チラシを配布し、情報を募った。注目すべき情報については、調査員が目撃時の状態、場所、数などの確認調査を行った。

この調査の結果は、調査結果一覧 (P.88~) の「市民」欄に掲載した。

### 目撃情報募集チラシ



### (2) 調査員によるフィールド調査 (対象：哺乳類、爬虫類、両生類、鳥類、昆虫類)

調査員が日常生活や調査活動の際に観察したものを継続的に記録した。

### (3) 無人カメラ (熱センサーカメラ) による調査 (対象：哺乳類)

市内各所に合計 7 台の無人カメラを設置し、特に哺乳類の生息状況の把握を行った。

カメラの設置期間は特に定めてはいないが、場所を変えながら 1 か所につき 1 週間から 1 か月程度の期間設置した。撮影により確認できた数は、調査結果一覧 (P.88) に「無人撮影」として掲載した。

#### (4) 巣箱調査 (対象：ヤマネ、ニホンモモンガ)

ヤマネとニホンモモンガの生息を確認するため、市域西側山地に 49 個の木製巣箱を高さ 2m 位の位置に設置した。季節に合わせて巡回点検し、巣箱利用中の動物の確認及び巣箱に残る巣材から巣箱を利用している動物種の判定を行った。



巣箱を監視する無人カメラ



調査員による巣箱製作



調査員による巣箱調査

#### (5) 爪痕調査 (対象：アライグマ)

営巣場所を求めて建物の柱を上るときに、アライグマが柱に残す爪痕を生息の手掛かりにした。5 本の爪痕が並行に柱に付いているものが、典型的な生息痕跡であるが、3 本や 4 本のものもあり、多数の爪痕が重なっているものもある。

ムササビの爪痕との差異を検証する機会を得ていない問題点はあるが、この方法を開発した関西野生生物研究所の現地指導を受け、市内の社寺などの外柱、外壁などを点検した。



アライグマの爪痕



アライグマの食痕

#### (6) バットディテクターによる調査 (対象：コウモリ)

河川や空き地に夕方出向き、採餌のため飛翔しているコウモリをコウモリ調査用超音波受信機 (バットディテクター) を用いて、周波数による種の推定と目視による確認を

行った。また、可能な限り写真撮影も行った。

### (7) 球巣調査 (対象：カヤネズミ)

カヤネズミは、草の上に葉を編んで巣を作る珍しいネズミで、その特徴的な球巣により生息が確認できる。平井川及び横沢入地区については、市内の市民団体により継続的な調査が行われているため、本調査では、これまで調査が行われていない秋川（中下流域）10 地点、多摩川 2 地点の河川敷を対象にした。調査は、繁殖期のピークが過ぎた 12 月にカヤ原に入り、オギやススキの葉を編んで作られた球巣を探索し、発見数、主な巣材、周りの環境などを記録した。



オギで編まれたカヤネズミの巣

### (8) 野鳥調査 (対象：鳥類)

秋川と多摩川の合流点、小峰公園、横沢入地区、大悲願寺、戸倉地区（盆堀）の集落から盆堀林道、乙津地区（青木平）など市内の主だった観察地点で、双眼鏡を用いて目視と鳴き声による種類の確認を行った。また、可能な限り写真撮影も行った。



調査員による野鳥調査

### (9) 越冬幼虫調査 (対象：オオムラサキ、ゴマダラチョウ)

食樹のエノキの葉の裏にいる越冬幼虫を調べることにより、分布状況を把握した。「2 調査結果 (1) 地区の区分」で示す A、B、C の地区ごとに数本のエノキを選別し、調査を行うとともに、幼虫は幹を降りて越冬することを考慮して、樹木ごとに幹から半径 2m の範囲で落葉したエノキの葉に付いている幼虫を数えた。

また、オオムラサキと食樹を同じくする近縁種のゴマダラチョウの幼虫数も数えた。



調査員による越冬幼虫調査



保護しているエノキの落葉

### (10) 深沢地区定点調査（対象：昆虫類）

市内でも昆虫類が豊富と考えられる深沢地区で調査を実施した。

平成21(2009)年9月16日から平成23(2011)年5月8日まで、深沢地区の穴沢天神社から南沢林道入口付近の間を徒歩により昆虫を探し、写真撮影を行った。後日写真から同定を行い、一部の不明種は専門家の協力を得て同定を行った。なお、調査結果一覧(P.119)には種が判明したものだけを掲載した。



深沢川的环境

### (11) 水生生物調査（対象：魚類、底生生物など）

タモ網を使って魚類と底生生物などを捕獲し、種類ごとに大きさと数を記録した（通称：ガサガサ生物調査）。調査場所は、平井川の新開橋下流区間（橋から約120mの範囲）とし、広く市民（子どもを含む）から調査員を募集した。経年変化をみるため、平成20(2008)年9月、平成21(2009)年8月、平成22(2010)年9月（増水により調査員のみで実施）、平成23(2011)年9月に同じ場所で継続して実施した。



秋川については、同じ方法を用いて、上流（ファミリーロッジ五日市付近）、下流（小川久保桜公園上流）、用水路（南秋留小学校付近）の3地点で、調査員のみで調査を実施した。

### (12) 秋川漁業協同組合アンケート調査（対象：魚類）

生息魚種の変化を大まかに把握するため、秋川漁業協同組合の協力を得て、全15支部にアンケート調査を実施した。アンケート内容は、これまで秋川漁業協同組合の管轄内で生息を把握している39種の魚類（外来種を含む）を対象にし、見たことがあるかどうかについて、過去と現在に分け、見かける頻度を5段階で回答いただいた。

		1. よくある	2. 時々ある	3. めったにない	4. 全くない	5. わからない
ゼゼラ	現在	1	2	3	4	5
	昔	1	2	3	4	5
コイ	現在	1	2	3	4	5
	昔	1	2	3	4	5
~~~~~						
メダカ	現在	1	2	3	4	5
	昔	1	2	3	4	5
ヨシノボリ	現在	1	2	3	4	5
	昔	1	2	3	4	5

アンケート回答 (2/3)

魚類アンケート（イメージ）

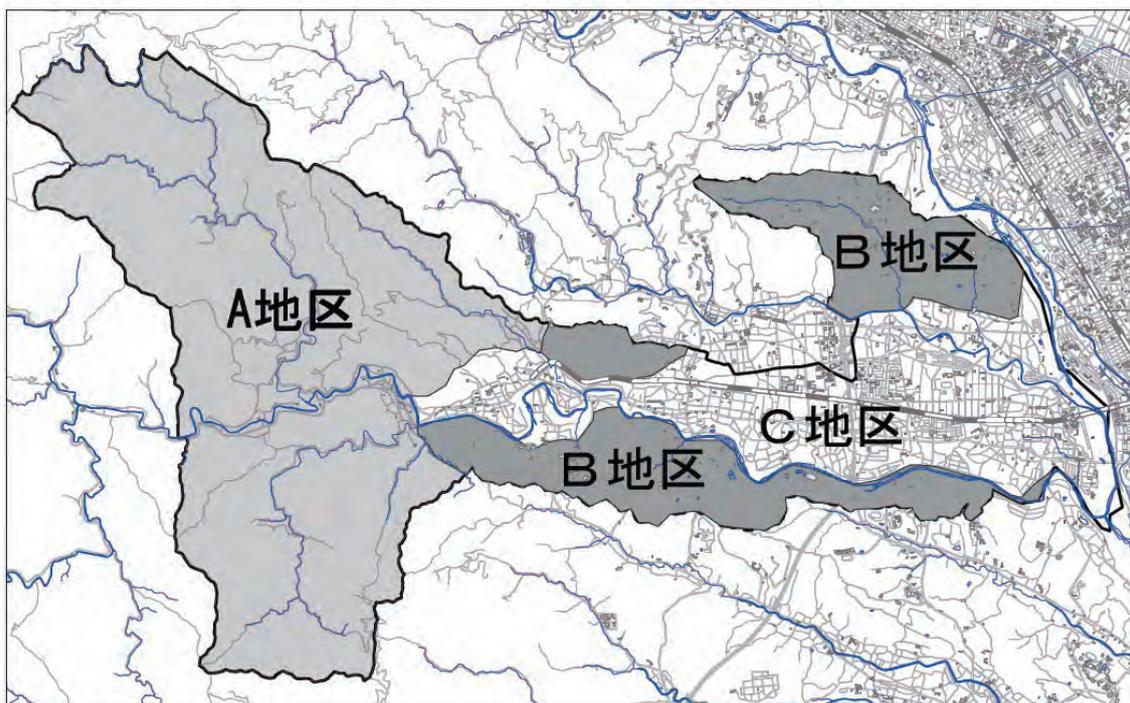
## 2 調査結果

### (1) 地区の区分

調査結果をまとめるにあたって、市内を環境が類似している3地区に分け、区分地図として整理した。地区の区分は主としてA地区は山地、B地区は丘陵地、C地区は盆地及び台地を示している。

※各地区の境界は、動物の移動性から見て厳密ではない。

区分地図



この地図は、国土地理院基盤地図情報(縮尺レベル 25000)東京都を使用したものである。

(2) 確認された動物

市民からの目撃情報及び調査員による各種調査の結果を以下にまとめた。また、表に続けて主な動物の特性や確認の状況などを記載した。なお、動物の写真については、特に記載のないものは、調査期間中に調査員が撮影したものがある。

① 哺乳類

◇ 調査結果一覧 (ウォンテッド調査、調査員によるフィールド調査、無人カメラによる調査、巣箱調査、爪痕調査、バットデテクターによる調査、球巣調査)

RD	種名	A地区						B地区						C地区						B集計	C集計	総計
		市民		調査員		市係員		市民		調査員		市係員		市民		調査員		市係員				
		目視	被害 他	目視	無人 撮影 他	死体 回収	農業 被害	目視	被害 他	目視	無人 撮影 他	死体 回収	農業 被害	目視	被害 他	目視	無人 撮影 他	死体 回収	農業 被害			
	タヌキ	12	2	1	11	2	20	48	41	1	29	4	53	128	61	3	10	63	1	141	317	
特定外来種	アライグマ	5		1	4	24	1	35	10		14	30	2	58	3		3	32	1	39	132	
都VU	カヤネズミ							0			105			105				14		14	119	
外来種	ハクビシン	3		4	8	1	5	24	16		1	10	9	37	18		1	17	4	41	102	
	イノシシ	6	4	3	1	5	3	38	11	1	6	1	4	46	2	2			2	7	91	
	イタチ	1			2	2	1	6	10		1	4	1	16	25		3	5	1	35	57	
	キツネ	2		1	2	2	2	7	11		1	3	3	15	16		2	1	9	34	56	
都NT	ニホンザル	18		6	6		6	30					3	3	3					3	36	
	テン	6		1	10			17	5		1	4		10			1			1	28	
	アナグマ	2		1	3	1	4	11	2		8	2		12	1		1			2	25	
特定外来種	クハラリス(タイワンリス)							0						0	11		1	3	2	18	18	
	ムササビ	4		3		1		8	2		4			6					1	1	15	
	ニホンジカ	4	2	2	1	4		13	1		1			2						0	15	
	ニホンリス	3		3				6	3		2	2		7						0	13	
	ニホンノウサギ	1		1	1	2		4			3			3						0	7	
都EN	ツキノアグマ	5		3		1		9						0						0	9	
特別天然記念物、都VU	カモシカ	3	1					4						0						0	4	
都DD	キクガシラコウモリ							0	2					2						0	2	

EX:絶滅 EW:野生絶滅 CR:絶滅危惧IA類 EN:絶滅危惧IB類 VU:絶滅危惧II類 NT:準絶滅危惧 DD:情報不足 \* 留意種 - :データ無し ・:非分布



## ◇主な哺乳類

### ・タヌキ



調査員が市内各所に設置した無人カメラによって最も多く撮影された。また、最も多くの市民に目撃され、市による路上死体の回収が最も多い野生動物である。ため糞の目撃情報数を調査結果のその他の欄に記載した。

### ・アライグマ



生息個体や痕跡が、戸倉地区（盆堀）以外のほぼ全域で確認されている。調査結果のその他欄の数値は、柱などにアライグマの痕跡が残されている社寺などの数を示している。

市内で調査した社寺 112 軒の内 86 軒（77%）で爪痕が確認されており、多くの個体の生息が予想される。

### ・カヤネズミ



カヤネズミの生息地は、河川敷や休耕地のカヤ原に限られているため、調査員が秋川 10 地点、多摩川 2 地点の河川敷（オギ群落）で営巣調査を行った。

その結果、いずれの地点でも巣が確認された。調査結果の数値は発見した巣数である。

### ・ハクビシン



タヌキに次いで、無人カメラで多くの個体が撮影された。また、多くの市民に目撃され、路上死体の回収が多い野生動物である。山地、里山、住宅地のいずれでも無人カメラで撮影されている。

### ・イノシシ



農作物の食害や畑地芝地の掘り返しなどの農業被害の事例が多い種類である。山地と里山の記録が多いが、多摩川河川敷に接した住宅地での目撃記録が数件ある。

### ・イタチ



秋川、平井川及びその支流の川岸近くでの生息記録が多い。特に、秋川では高尾地区・館谷地区より下流域、平井川では代田橋より下流域の記録が多い。

### ・キツネ



山地、里山、住宅地での市民による目撃、調査員による無人カメラでの撮影記録があり、住宅地での死体回収事例もある。キツネ特有の一直線の足跡が秋留台地の耕作地に多い。キツネの行動範囲は広く、少数の個体が広範囲に行動している可能性がある。

### ・ニホンザル



市域西側の山地に接した集落の畑地や道路などで、数頭の子連れの群や単独行動の個体が確認されている。市街地やその周辺で単独個体を目撃した事例もある。

### ・テン



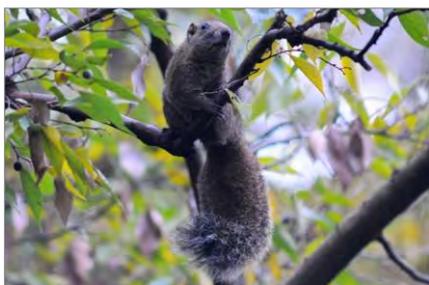
山地と丘陵地で、無人カメラによる撮影記録が多く、里山地域の人家近くでの目撃情報もある。秋川崖線緑地帯での無人カメラによる撮影記録もある。

### ・アナグマ



目撃数があまり多くない割には、山地や丘陵地、河川敷近くの人家の庭など、生息確認地域が広範囲に及んでいる。秋川崖線緑地帯での無人カメラによる撮影の記録もある。

#### ・クリハラリス（台湾リス）



秋川左岸崖線の山田地区から牛沼地区に至る緑地帯で生息が確認されている。外来生物対策のため、独立行政法人森林総合研究所により、平成 23 年度までに 14 頭が捕獲された。他地域への移出個体の存在が心配される。

#### ・ムササビ



山田大橋より西側の秋川溪谷流域で確認されている。しかし、市街地における路上死体回収が1例あり、市街地の社寺林・屋敷林での孤立化した個体群の存在が考えられ、ムササビを対象にした集中調査が必要である。

#### ・ニホンジカ



市域西側の山地の尾根筋や林道、山地に連なる里山の尾根筋で確認されている。生息地である奥多摩山地から移動してきた個体と思われるが、市内の山地がシカの生息地になると、林業被害などが心配される。

#### ・ニホンリス



草花丘陵と網代地区、横沢地区以西の山地や里山での目撃、鳴き声の聴き取りの記録がある。クリハラリス（台湾リス）の生息地に近いため、両者の競合が心配される。

#### ・ニホンノウサギ



秋川丘陵の3か所で無人カメラ撮影により確認された。市域西側の山地で、2件の目視確認があり、雪上の足跡や糞による確認もされたが、情報は少ない。

### • ツキノワグマ



養沢地区と乙津地区で目撃されている。クマ棚による生息確認もある。奥多摩山地から移動してきた個体を確認したものと考えられる。これらの地域が必ずしもツキノワグマの生息地ということではない。

(※この写真は、奥多摩町大丹波山中で撮影されたものである。)

### • カモシカ



養沢地区（上養沢）の高岩山周辺、麻生山周辺の金比羅尾根で目撃されている。奥多摩山地から侵入してきた個体が行動域を広げ、市域で確認されてきたと考えられる。

### • キクガシラコウモリ



網代地区の洞窟で、平成 21（2009）年 9 月に 1 頭が目撃され、撮影された。市内では初めての生息記録である。その後、同洞窟では確認されていない。

### • コキクガシラコウモリ



養沢地区の洞窟で平成 22（2010）年 10 月に 12 頭が目撃され、撮影された。年間を通じての生息状況や季節的に移動する範囲も明らかではない。

### • イエコウモリ（アブラコウモリ）



秋川地区、下代継地区、引田地区など住宅地での飛翔個体や、人家の戸袋や天井裏などに入り込んでいる例が報告されている。目視以外にも、撮影や室内に飛び込んできた個体によって生息が確認されている。

#### ・モリアブラコウモリ



秋川の小和田地区（佳月橋下流）の川面上を飛翔中にバットディテクターと撮影によって確認された。詳細な生態は明らかではないが、森林性のコウモリで、秋川の清流と両岸の樹林が、採食に飛来する環境をつくっていると思われる。

#### ・モモジロコウモリ



秋川の小和田地区（佳月橋下流）の川面上を飛翔中にバットディテクターと撮影によって確認された。洞窟性のコウモリであるが、崖の岩の割れ目や下水道管などでも昼間を過ごすことが知られている。

#### ・ヤマネ



市域西側山地の立木に設置した巣箱 49 個の内 1 個でヤマネの個体が確認され、撮影された。他の巣箱 3 個でも、ヤマネの巣材が見られ、生息がさらに確認された。市内での撮影によるヤマネの生息確認は初記録である。

#### ・ニホンモモンガ



市域西側山地の神社境内の樹洞から顔を出した 1 個体が、調査員によって確認された。また、設置した巣箱 49 個の内 2 個で、細裂したスギ樹皮塊の巣材が確認された。ニホンモモンガと思われるが、ニホンリスの可能性もあり確定できていない。

#### ・ヒメネズミ



市域西側山地に設置した巣箱の 1 個で確認された。巣箱内にもヒメネズミ特有の巣材が確認された。枯葉などを巣孔近くまで、巣箱いっぱい詰め込んでいる場合が多い。アブラチャンなどの堅果の食べかすが残されている場合もある。

## • アカネズミ



トラップ設置などによるネズミ類の生息調査は行っていないが、設置した無人カメラに、山地で2件、里山で2件の撮影があり生息が確認された。また、住宅地の川岸で、調査員に目視された個体もある。

②爬虫類（ヘビ類）

◇調査結果一覧（ウオントンテッド調査、調査員によるフィールド調査）

RD	種名	A地区				B地区				C地区				C集計	総計
		市民		調査員		市民		調査員		市民		調査員			
		生体	死骸												
都NT	アオダイショウ	14		1		23	1	1		25	2	73	2	75	115
都VU	ヤマカガシ	9		4	1	9	1	2	1	13	4	46	4	50	77
都EN	マムシ	3		1		6	4		1	11	1	26	1	28	44
都NT	ジムグリ	6		1		1		1		2	4	27	4	33	43
都NT	シマヘビ	3		1		8		1		9		10		10	23
都NT	タカチホヘビ	1		2	2	6		1		1	2	11	2	15	22
都NT	ヒバカリ	1		2		4	1	1	1	3	1	11	1	13	20
都NT	シロマダラ	2		1		3	1			1	5	2	2	9	13
	不明	2				2	6	1		7	3	24	3	27	36
	総計	41	4	13	3	61	54	9	6	72	22	230	22	260	393

EX:絶滅 EW:野生絶滅 CR:絶滅危惧ⅠA類 EN:絶滅危惧ⅠB類 VU:絶滅危惧Ⅱ類 NT:準絶滅危惧 DD:情報不足 \*:留意種 -:データ無し ・:非分布

## ◇主な爬虫類（ヘビ類）

## • アオダイショウ



8種のヘビの中で最も情報数が多く、全体の4分の1を占める115件の情報があった。市内各地から広く情報が寄せられたが、中でも市街地であるC地区の情報が一番多い。この傾向は他の種でも共通する。ヘビの情報は、偶然遭遇した場合がほとんどであるため、人口の多い市街地に集中したものと思われる。

## • ヤマカガシ



アオダイショウに次いで情報が多く、全体の5分の1を占める77件の情報があった。市内各地から情報が寄せられたが、河川及びその周辺での情報が多かった。

## • マムシ



44件の情報が寄せられた。秋川上流周辺での情報が比較的多く、河川沿いの情報が8件あった。

## • シムグリ



市内各地から43件の情報が寄せられた。その内20件が自宅の庭や駐車場など人家での目撃情報であった。

## • シマヘビ



23件と情報数が少なかった。他の種に比べると山地、丘陵地での確認の割合が高い。

(写真はカエルを捕らえたシマヘビ)

• タカチホヘビ



夜行性のヘビとしては、予想以上に多い 22 件の情報が集まった。そのうち 7 件は死骸による確認で、昼行性の種よりも死骸で発見される割合が高かった。

• ヒバカリ



20 件と情報数は少なめだったが、山林、河川、市街地を含む市内各地から情報が寄せられている。

• シロマダラ



夜行性で「幻のヘビ」とも言われる。その割に 13 件と多くの情報が寄せられたが、その半数を超える 8 件が死骸による情報だった。市街地からの情報 9 件は、いずれも JR 五日市線以南の地域であった。また、戸倉地区（盆堀）、乙津地区（青木平）、深沢地区の山地でも確認された。

③両生類

◇調査結果一覧（ウォンテッド調査、調査員によるフィールド調査）

RD	種名	A地区						B地区						C地区						C集計	総計			
		市民			調査員			市民			調査員			市民			調査員							
		成体	幼生	卵	成体	幼生	卵	成体	幼生	卵														
	アズマヒキガエル	2		1	7	2	12	9	1	3	4	1	2	20	67	1	10	2				1	81	113
都NT	モリアオガエル	4	1	5	3	1	17	5	6	6	6	2	2	19	1	1	8				1	11	47	
	アガエル(ヤマがニホンカ不明)	1	1	3	1	2	8	3	1	6	1	1	7	19	8		1	2	3		1	15	42	
都NT	ヤマアカガエル	5	3	6	2	1	19		4	1	1	3	9	3	3		1	1		1	3	8	36	
都NT	ニホンアマガエル						0	1					1	14				5				19	20	
都NT	カジカガエル	1					1	4			5	1		10	4			4				8	19	
都NT	ナガレタゴガエル	3			11	1	15						0									0	15	
国NT、都VU	トウキョウウダルマガエル						0	1			2			3	1			7				8	11	
都VU	ニホンアカガエル	1			1		2			3	1		4	4	1		3		1			5	11	
都VU	ツチガエル						0	2			2		4	4	3		3					6	10	
国NT、都EN	アカハライモリ						0	2			4			6	3							3	9	
都NT	シュレーゲルアオガエル						0				4	2		6				2				2	8	
都NT	タゴガエル	1			2		3	1			1		2	2								0	5	
特定外来種	ウシガエル						0						0	0	3			1				4	4	
	種名不明のカエル	3	1	2			6	2			3		5	22		2		2				26	37	
国VU、都EN	トウキョウウサンショウウオ			2		3	5	4		6	4	9	23	1		5					3	9	37	
国NT、都NT	ヒダサンショウウオ		1				1						0									0	1	
	総計	21	7	19	27	2	89	34	2	28	35	7	25	131	131	2	29	27	6	1	9	205	425	

EX:絶滅 EW:野生絶滅 CR:絶滅危惧ⅠA類 EN:絶滅危惧ⅠB類 VU:絶滅危惧Ⅱ類 NT:準絶滅危惧 DD:情報不足 \*:留意種 -:データ無し ・:非分布

## ◇主な両生類

### ・アズマヒキガエル



両生類の中で情報数が圧倒的に多く、市街化の進んだC地区の情報が入割を占めた。「ガマガエル」「イボガエル」「ヒキガエル」などとして寄せられた情報も多く、市民にとって一番身近なカエルといえる。

### ・モリアオガエル



山地、丘陵地、市街地からほぼ同数の情報が寄せられた。泡状の特徴的な卵塊で確認しやすいことから、情報数の多さにつながったものと思われる。



モリアオガエルの卵塊

しかし、調査員による確認調査では、多くの産卵場所において1、2個の卵塊しか確認できず、今後の個体数の減少が心配される。

### ・ヤマアカガエル



山地での情報が多く、中でも盆堀川沿いでの目撃が多かった。また、情報数は少ないが、秋川中下流域、平井川流域でも生息が確認された。

### ・ニホンアカガエル



ヤマアカガエルに比べると情報数が3分の1以下だった。ヤマアカガエルが山地での情報が多かったのに対し、ニホンアカガエルは丘陵地、市街地での情報が多かった。

※卵塊及び幼生の場合、ヤマアカガエルかニホンアカガエルかを同定するのは困難であるため、調査結果には「アカガエル」として記録している。

• ナガレタゴガエル



15件中12件が調査員による確認である。産卵時期に盆堀川や大岳沢、御岳沢で成体及び卵塊を探し、生息を確認した。

• タゴガエル



5件のみの情報で、いずれも調査員による確認である。養沢川及び菅生地区で生息が確認された。

• ニホンアマガエル



20件中19件が市街地での情報であり、住宅街の狭い緑地で確認された例が多かった。本種は、卵塊が小さく発見しにくいため、今回の調査では、全て成体での確認であった。

• トウキョウダルマガエル



11件中3件は同一の場所での情報であるため、生息が確認できたのは9地点のみである。秋川及び平井川の両流域で確認されたが、今後の個体数の減少が心配される。

• ツチガエル



10件のみの情報で、その内7件が平井川流域での情報であった。特徴のある鳴き声だが、一般的にはあまり知られていないため、今回の情報収集にはつながらなかった。

・シュレーゲルアオガエル



8 件のみの情報で、いずれも調査員による情報である。産卵時期に、生息が予想される水田及び湿地を調査して確認できた例が多い。

・カジカガエル



19 件中 11 件の情報が、声による確認であった。平井川及び秋川中下流域での情報が多かった。

・ウシガエル



声による情報が秋川流域から寄せられた。秋川ふれあいランド周辺、切欠地区、南秋留小学校周辺、秋川橋下流の 4 件である。

・トウキョウサンショウウオ



近年絶滅が心配されている種であるが、卵のうが発見しやすいことや市民の関心が高いことから、18 件の情報が寄せられ、調査員情報と合わせると 37 件に上った。



調査員による追跡調査では、産卵場所が乾燥化しつつあるケースや成体及び卵のうがアライグマの食害を受けているケースが確認されている。

トウキョウサンショウウオの卵のう

## • ヒダサンショウウオ



限られた溪流に生息する種で、今回の調査では1件のみの情報に限られた。

(写真は幼生である。※2012年撮影)

## • アカハライモリ



9件のみの情報で、いずれも秋川中流域での情報である。情報を寄せた市民からは、「昔はごく普通に見られたが、最近は滅多に見られなくなった。」との話が聞かれた。

④鳥類

◇調査結果一覧（ウォンテッド調査、調査員によるフィールド調査、野鳥調査）

RD	種名	A地区					B地区					C地区					C集計	総計						
		市民		調査員			市民		調査員			市民		調査員										
		目視	鳴き声 その他	目視	鳴き声 その他	その他	目視	鳴き声 その他	その他	目視	鳴き声 その他	その他	目視	鳴き声 その他	その他									
	キセキレイ	7		3													9	14	2	1		17	36	
都NT	ホトギス		4		8					6	4						10	2	7		3		12	34
都VU	フクロウ	1	3	7	10					1	3	2					6	1	3				4	31
都VU	アオバズク	1		1	10					3							3		12		2		14	29
	ウグイス			7	3					1							9		3		2	1	6	25
都NT	ヒバリ	1	1														0	12	2		3		17	19
国DD、都NT	オンドリ	2		5						6	1						7	3			1		4	18
	メジロ			8							5						5	1			3		4	17
	エナガ			10							3						3				2		2	15
	ジョウビタキ			6							6						6				2	1	3	15
国EN、都CR	クマタカ			11	2						1						1						0	14
	ルリビタキ	1		6							7						7						0	14
都VU	ノスリ			3							5						5				5		5	13
都NT	クロジ			4							8						8						0	12
	アオジ			1	1						8						8				2		2	12
	ヤマガラ			9							3						3						0	12
	アオサギ			3						1	2						3				4		4	10
	ツグミ			4							5						5				1		1	10
都NT	ウソ			3							5	2					7						0	10
特定外来種	ガビチョウ			1						1	1	3					5	1		1	2		4	10
	ホオジロ			4							2						2				3		3	9
	カケス			3							5						5						0	8
国NT、都VU	ハイタカ			4													0				4		4	8

EX:絶滅 EW:野生絶滅 CR:絶滅危惧IA類 EN:絶滅危惧IB類 VU:絶滅危惧II類 NT:準絶滅危惧 DD:情報不足 \*:留意種 -:データ無し ・:非分布





RD	種名	A地区				B地区				C地区				C集計	総計
		市民		調査員		市民		調査員		市民		調査員			
		目視	聞き その他												
国NT、都DD	ミサゴ											2		2	2
	ノビタキ											1	1	2	2
都VU	クサシギ											2		2	2
国VU、都CR	サンショウクイ				2									0	2
都NT	コサギ					1						1		1	2
	マガモ							1						0	1
都NT	カイツブリ											1		1	1
	ハシボソガラス							1						0	1
	ハクセキレイ											1		1	1
都NT	クイナ											1		1	1
都VU	バン											1		1	1
都NT	トビ											1		1	1
都NT	カワガラス					1								0	1
都VU	イカルチドリ											1		1	1
都VU	オオバン											1		1	1
都DD	アマツバメ					1								0	1
都VU	エゾムシクイ													0	1
都VU	イソシギ					1								0	1
	ツバメ											1		1	1
都VU	ツミ											1		0	1
	スズメ													0	1
都NT	キバシリ					1								0	1
都NT	セグロセキレイ													0	1
	コムクドリ													0	1
国EN、都CR	フッポウソウ													0	1
都VU	ヤマシギ													0	1

EX:絶滅 EW:野生絶滅 CR:絶滅危惧ⅠA類 EN:絶滅危惧ⅠB類 VU:絶滅危惧Ⅱ類 NT:準絶滅危惧 DD:情報不足 \*:留意種 -:データ無し ・:非分布

RD	種名	A地区						B地区						C地区						C集計	総計						
		市民			調査員			市民			調査員			市民			調査員										
		目視	聞き声	その他																							
	コガモ						0				1						1								0	1	
	ハンブトガラス						0				1						1									0	1
	コガラ						1										0									0	1
都EN	コサメビタキ						1										0									0	1
都NT	コシアカツバメ						0										0									1	1
	総計	13	10	0	195	53	5	276	19	12	1	145	15	0	192	41	30	2	101	10	1				185	653	

EX:絶滅 EW:野生絶滅 OR:絶滅危惧ⅠA類 EN:絶滅危惧ⅠB類 VU:絶滅危惧Ⅱ類 NT:準絶滅危惧 DD:情報不足 \*:留意種 -:データ無し •:非分布

## ◇主な鳥類

## • キセキレイ



ウォンテッド調査の対象とした。セキレイはあきる野市の鳥としても知られており、観察もしやすいため、情報数が最も多くなったと思われる。市内全域での生息を確認した。

## • ホトトギス



情報は20件と多いが、ほとんどが声のみの情報である。ウォンテッド調査のチラシを配布した時期が鳴く時期と重なり、声も大きく特徴的なため、情報数が多くなったと考えられる。情報の寄せられた時期が集中しており、1個体の鳴き声が複数の情報になった可能性が高く、一概に個体数が多いとは言えない。

## • フクロウ



情報は多かったが、声が聞こえる繁殖期には毎晩のように鳴き、声も大きいので、個体数が多いとは限らない。アオバズクの声をフクロウと思っている人も多いため、情報が寄せられる度に調査員が情報提供者を訪ね確認を行った。

## • アオバズク



夏鳥として飛来し、市街地の街灯などにとまり特徴のある声でよく鳴くので確認しやすい。ウォンテッド調査では想像していた以上に多くの情報が寄せられ、市内の各地で繁殖していることを確認した。

## • ウグイス



丘陵地から亜高山帯まで幅広い地域で繁殖する鳥で、低木林や笹原（藪）があれば繁殖できる鳥である。市内でも河原、丘陵地、山地など多様な場所での主に声による確認情報が寄せられた。さえずりは誰もが知っているため、情報数も多くなった。

### ・ヒバリ



以前は秋留台地に多く生息していたが、近年非常に減少している種である。ウォンテッド調査により、秋留台地を中心に、雨間地区や小川地区の河川敷など限られた地域で生息が確認された。

### ・オシドリ



市内では秋川沿いに生息が確認され、引田地区から上流の乙津地区（青木平）まで目撃情報があった。多くは繁殖期に山地に移動するが、少数が市内に留まり、山林や社寺林の樹洞で繁殖している。初冬に山地から移動してきた個体と合流して 20～30 羽の群れになり、十里木から上流域での生息が多い。

### ・カッコウ



近年、生息確認が少ないため、ウォンテッド調査の対象種とした。市民からの情報は、C地区で目撃情報が1件あった。調査員からの情報はB地区で1件、C地区で4件である。B地区の鳴き声の1件は、平成23（2013）年に草花地区で、渡りの途中に一声発したものを聞いた記録である。他の5件については、平成14（2002）年と平成17（2005）年の秋留台地での記録である。（※撮影は2002年）

### ・クマタカ



非常に貴重な種であるため、特に注目し、目撃情報をもとに調査員ができる限り調査した。目撃件数は14件であるが、個体数を示すものではない。

### ・オオコノハズク



市内では、戸倉地区（盆堀）、養沢地区、乙津地区（青木平）など主に市域西側で、調査員による目撃情報が7件あった。また、調査員が林や社寺林の樹洞での繁殖を確認している。アオバズクよりさらに静かな環境を好み、個体数も少ない。

### ・オオタカ



市民と調査員から合わせて7件の目撃情報があった。市民情報の中には、自宅の庭でドバトを捕えた目撃事例や、隣家の屋根にとまっていた幼鳥の写真提供も含まれている。市内の草花丘陵や加住丘陵などのモミ林やマツ林で、新たな繁殖も確認している。

### ・ミソゴイ



調査期間中、新聞などで話題となったが、生息数が少なく、4月中旬から数日間のみ夕方から夜にかけて鳴く鳥で、確認が非常に難しい。市民と調査員からの7件の情報はいずれも鳴き声による確認である。

(※撮影は2001年(ヒナ))

### ・サンコウチョウ



戸倉地区、深沢地区、入野地区で市民と調査員から合わせて6件の情報があった。限られた場所に渡来する数の少ない種である。

### ・ヤマセミ



以前は、雨間地区、引田地区、養沢地区、乙津地区(青木平)などの秋川沿いで繁殖していたが、最近では、市域西側に生息が限られている。戸倉地区(星竹)から乙津地区(青木平)にかけての情報が6件あったが、移動範囲が比較的に広いいため、同じ個体を確認した可能性が高い。

### ・ハヤブサ



秋川と多摩川の合流点周辺で調査員により5件の情報があった。追跡調査では2個体の確認のみであった。この鳥は、開けた河原や田畑で狩りをするため、そのような場所で目撃できる。

### ・ミサゴ



秋川と多摩川の合流点周辺で調査員により2件の情報があった。この鳥は、開けた河川などで魚類を狩りする。市内では、特に落ち鮎の頃（9月下旬）から数羽が鮎などの魚を捕獲する姿が見られている。

（※撮影は2008年）

### ・アカショウビン



市民と調査員から3件の声による情報があった。個体数の非常に少ない鳥であり、情報日時が違うことから、同じ個体の声を聞いた可能性もある。

（※この写真は、2002年に檜原村で撮影されたものである。）

### ・ブッポウソウ



小中野地区から1件のみの情報である。東京都では過去3年ほど繁殖の記録がない。檜原村や奥多摩町で生息が途絶え、市内の戸倉地区（盆堀）が唯一の繁殖地であったが、3年ほど前から繁殖が途絶え、最近では声も聞くことがなかった。

（※撮影は2009年）